

## キュウリつる下ろし栽培における高収量および省力整枝方法

【要約】抑制作型で更新型つる下ろし栽培、半促成作型でストレート型つる下ろし栽培を組み合わせることが収量の増加に有効である。また、更新型つる下ろし栽培は側枝の管理作業時間の削減に加え、作業負担が少ない収穫位置であることから省力化が期待できる。

農業技術センター 野菜部

【連絡先】 058-239-3133

### 【背景・ねらい】

近年のキュウリ産地では果実が連続でつきやすく、側枝の出も良い品種が広く栽培されている。これらの特性からつる下ろし栽培において誘引枝の摘心、つる下ろしを連続で繰り返す更新型つる下ろし栽培が広がりつつある（図1）。しかし、生長点を摘心するリスクとして、次の側枝がスムーズに出ない場合に減収につながる恐れもある。そこで、高収量化や省力化を目指したつる下ろし栽培の整枝方法を検討する。

### 【成果の内容・特徴】

- 1 抑制作型において誘引枝を5節ごとに摘心する更新型つる下ろし栽培を行うことで、1果重が増加し、可販収量が更新を行わないストレート型つる下ろし栽培より5%増加する（表1）。
- 2 半促成作型においてストレート型つる下ろし栽培を行うことで、着果数の増加によって可販収量が更新型つる下ろし栽培より28%多くなる（表2）。
- 3 抑制作型においては更新型つる下ろし栽培、半促成作型においてはストレート型つる下ろし栽培が収量増加に有効と考えられる。
- 4 更新型つる下ろし栽培を行うことで、作型に関わらず可販果1果重は増加する。
- 5 更新型つる下ろし栽培の収穫節位はストレート型つる下ろし栽培よりも高い位置で推移する（図2）。
- 6 更新型つる下ろし栽培においてつる下ろし、摘葉の作業時間が減少することで、側枝の総管理時間が30%減少する（表3）。
- 7 更新型つる下ろし栽培は側枝の管理作業時間の削減に加え、作業負担が少ない収穫位置であることから省力化が期待できる。

### 【成果の活用・留意点】

- 1 本成果は、バッグ方式の養液栽培において栽培密度 10a あたり 1,000 株（仕立て本数は株あたり4本）で実施した結果である。
- 2 ストレート型つる下ろし栽培は、絶え間なく雌花が発生し、常に側枝伸長と栄養成長が伴うため、曇雨天の場合は流れ果や果実肥大の遅れによる細長い果実ができやすいことに注意が必要である。
- 3 更新型つる下ろし栽培では更新後に誘引枝となる側枝の伸長が遅い場合、収穫位置が上がり続け、収穫が途切れることがあるため注意が必要である。
- 4 作業時間の削減には摘心頻度の高い更新型つる下ろし栽培が適している。

【具体的データ】

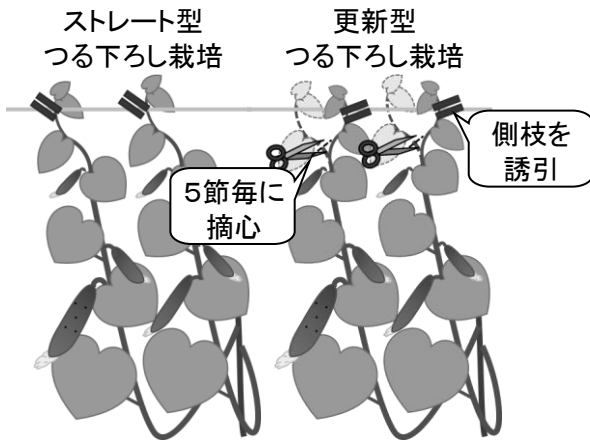


図1 キュウリの仕立て方法

表1 抑制作型における整枝方法が収量に及ぼす影響(2023年)

試験区	月別可販収量(kg/10a)				可販果1果重 (g/個)
	9月	10月	11月	合計	
ストレート型区	2,226	4,344	4,063	10,633	73.0
更新型区	2,172	5,366	3,662	11,199	78.8

表2 半促成作型における整枝方法が収量に及ぼす影響(2024年)

試験区	月別可販収量(kg/10a)							可販果1果重 (g/個)
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	合計	
ストレート型区	115	1,718	4,932	6,396	6,521	7,258	26,940	87.6
更新型区	103	1,933	4,417	4,821	5,309	4,392	20,975	94.1

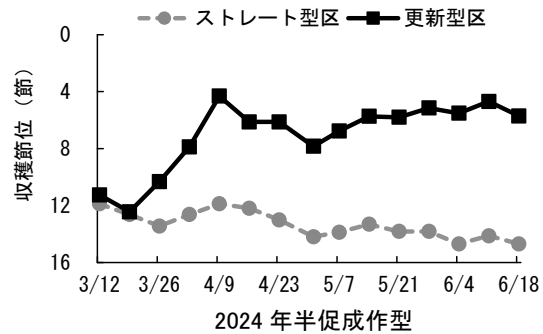
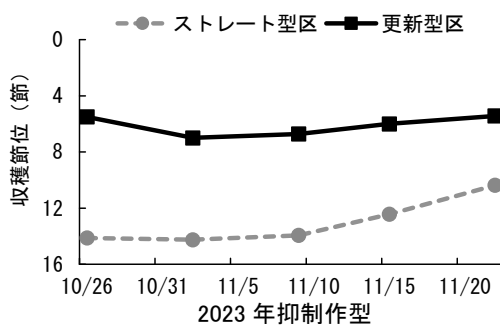


図2 収穫節位の推移

表3 側枝の管理作業時間(時間/10a、2023年抑制作型)

試験区	つる下ろし	摘心	摘葉	腋芽かき	合計
ストレート型区	261.5	7.3	174.0	54.2	496.9
更新型区	139.6	55.2	101.0	50.0	345.8 (69.6%) <sup>2</sup>

<sup>2</sup> 括弧内の数値はストレート型つる下ろし栽培を100%とした割合

研究課題名：新規就農に適した新たな品目および生産体系の確立(令和3~7年度)

研究担当者：林 知宏